

大学出版 '99 秋

No.43



The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



読書の周辺 ビジネス和訳の落とし穴 ▼ 小林 薫 — 1

読書の周辺 経済学の時間・ヒトの時間 ▼ 吉田 雅明 — 6

〈第三回 日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー参加報告〉

日・韓・中における大学出版部の社会的な役割を考える ▼ 小林 敏 — 11

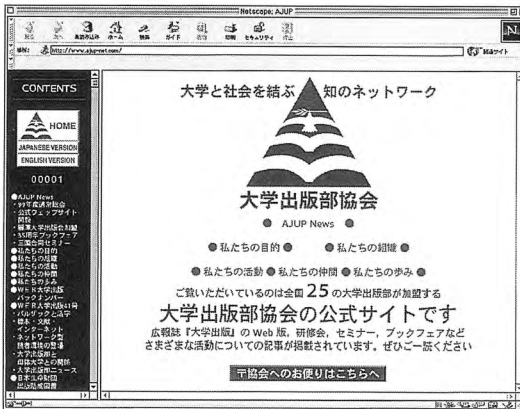
歩く・見る・聞く 知のネットワーク 16 — 15

大学出版部ニュース(付・ウェブ上の大学出版部?) — 17

新刊案内 1999.7.9 — 27

表紙イラスト：ヨースト・アマン 「職人図鑑」より
 大学出版部協会マーク・デザイン：道吉 剛

〈書籍の表示価格は税別です〉



大学出版部協会ウェブサイト
<http://www.ajup-net.com/>

ビジネス和訳の落とし穴

小林 薫

依然、根が深い誤訳の構造

長年、経営やビジネス研究、とくに国際経営学というジャンルと、国際コミュニケーション研究、なかならず英語による異文化間のコミュニケーションという分野の両方に携わってきた筆者にとって、英文の著書や論文を邦訳する機会に数多く恵まれた。

米国の社会評論家のバンス・パッカーの『地位を求めろ人々』『The Status Seekers』を一九五〇年にダイヤモンド社から訳出して以来、この秋、弊学出版部から上梓予定の、スウェーデンの経営コンサルタントであるレナード・ローリンの“Strategic Leadership in the Learning Society”（仮題『学習社会における戦略的リーダーシップ』）に到るまで約六十冊の訳書や監訳書を刊行することができた。

また記事の方もアメリカの代表的ビジネス誌の『フォーチュン』や『ビジネスウィーク』誌やイギリスの『エコノ

ミスト』誌からの訳出や、経営学の領域ではナンバーワンといわれる『ハーバード・ビジネス・レビュー』誌や欧州経営開発協会（efmd）や米国経営推進学会（SAMA）などの学会誌から、かなりの論文を日本語に移し換えるチャンスがあった。

さらに、方々からのご依頼でマネジメント関係の翻訳原文のチェックや査読を行ったり、幾つかの翻訳コンクールの審査にも関係した。

というわけでこの四十年間の経験を振り返ってみると、日本における英文和訳、とくにビジネスやマネジメント関連の邦訳もかなり量も増え、質も向上したように見えるが、よくよく吟味してみると、残念ながら依然として、とんでもない思い違いや勘違いが意外と多く目につく。また、一見、流麗な訳筆のように思えるが、原文や原意と大きく掛け離れているのがつき驚く。

こうした個人としてのささやかな翻訳史を背景に、以下、誤訳に引きずり込む二つの落とし穴をまず経験則に照

らして述べてみよう。

落とし穴・その① 真摯さの欠如く湾頭に吼ゆる獅子

明治の昔から、邦訳は、外国の文化・芸術・技術を伝える大事な用具であったが、それに携わる人々は、かつては今よりもずっと真剣に取り組んでいたように思える。

有名な話としては、a lion at bayという表現を「湾頭に吼ゆる獅子」と、いかにも文学的に格調高く訳したところ、これは大間違いであり、このbayは湾ではなくて獵犬などによって追い詰められた状態を指すので、正しくは「追い詰められた獅子」、あるいは「窮地に立つ獅子」の意であることを刊行後指摘されて自らの生命を絶った翻訳者の話が伝わっている。

そこまで厳しくしなくても、かつて山村暮鳥がボードレールの訳詩集を英訳版から翻訳した時、英語のtime pieces(本来は「計時器」時計の複数)を、「時、粉々に砕けて…」とこれまた大仰に訳したところ、その誤りを発見され、いたく恥じた彼は「爾来、一切訳筆を絶つ」と宣言した逸話も伝わっている。

これほどまで真剣に受け止めなくても、もう少し、真面目に取り組む態度が欲しいと思われるケースに多々お目にかかる。

例えば、ある下訳をチェックしていたところ、なかなか滑らかな文筆の運びで「アメリカ人はクレジットが好き

な国民である…」という一節が出てきたが、その後の文章と全く意が通ぜずどうもチグハグである。そこで原文に当たったところ、「The Americans are credential happy people…」となっていてcredit-happyはなご。

このクレデンシャルは「卒業証書、資格、学歴、肩書」の意味であるから、「アメリカ人は肩書き好きな国民である」と訳すべき筋合いの文章である。

この手のミスは、思い込みから起きたり、辞書を引くのを不精したりするところから来るのだが、もう少し真摯に丹念にやれば避けられる過ちであるといえる。

翻訳へのルーズな態度が生まれる理由は様々あろう。

その一つは、例の「超訳」と称する翻訳の領域を逸脱したあり方が大手を振ってまかり通っていることによる。

翻訳の種類として、一つの原本からヒントを得て、かなり恣意的に書き直した場合は、「超」などではなくて、本来は“inspired by” or “based on”(翻案)と称すべきものである。こうした慣行から安易なアプローチが醸成され易くなってきているともいえよう。

第二は翻訳マシンや安価なソフトによって、翻訳がかなり容易に行われるようになったことの影響がある。

ごく技術的な翻訳以外は、レビューとかチェッカーといわれる人々の手を経ない限り、ソフトを通しただけでは日本文としても、また正確さから言っても不十分なままである。

たしかに、最近のソフトは平均して中学生程度のレベルには漸く到達している。

しかし、社会で通用する大人の水準までは達していない。和文英訳の場合だが一例をとって説明しよう。

コピー機に関して「コピー用紙がない」というのは、かつてのようなレベルの翻訳機やソフトだと「Copy paper no.」とか「Copy paper no exist.」程度だった。やがて、レベルまでになった翻訳ソフトは「There is no copy paper.」とこういふまでやってきた。これはこれで一応通用はする。しかし、実際の現場の英語では「The tray is empty.」というのが一般の言い方である。このレベルまで到達するには、人工知能の力をさらに借りなければならぬのもう少し時間がかかる。

落とし穴・その②

辞書に頼ること、頼らぬこと、頼り過ぎ not to
buzzword (流行語) がブザー信号では

明治時代はおろか、ひと昔前に比べて辞書の整備の度合いは正に画期的といえる。英和辞典ならリーダーズ・グラープの最新版、英英辞書ならオックスフォード辞書兼類語辞典(アメリカ版)、ウエブスターの第三国際版…など優れたものが数多く刊行され、入手し易くなっている。専門用語の辞書については、あえて列記はしないが、かつてとは比較にならないほど多彩な形で整えられている。それだけ

ではない。インターネットを通じて、専門用語や概念に関しては容易に検索することができる時代となった。

それでいて、ごくシンプルな点に関してのミスやエラーがよく目にとまるのは、既述の通りの思い込みや不精によって辞書に当たらぬことに原因の一つがある。

とはいえ、辞書の方も、このご時世なのに、まことにひどいものが、ごく最近の版にもいろいろある。その一つが、こちらが泣きたくなるような誤訳満載の某ビジネス辞典。

acquisition (買収、合併) が「取得」、industrial acquisition (争議、ストライキ) が「産業活動」、affiliated company (関連会社) が「子会社」(子会社は正しくは subsidiary)、boardroom (役員室) が「会議室」、blue-collar worker (肉体労働者) が「労働者」、sales budget (販売予算) が「販売予測」、break even (損益分岐点に達する) が「均衡になる」、buzzword (流行語) が「ブザー信号」…と、これでは、訳文に誤訳が出てくるのも無理はない。しかし欠陥辞書だけを難ずることはできない。訳書の側でもビジネスの現実によく触れていない限り、ミスを犯してしまい易い。

たとえ supervisor が「最新刊の某辞書には「職工長」などという戦前風の古い訳が出ていても、実際のビジネスの現場に何らかの形で触れている人ならば、「監督者」ぐらいの訳はすぐにでてくるはずである。

企業経営の中でよく「三現主義」ということが言われて

いるが、現実 (reality) / 現場 (job site) / 現物 (actual thing) の三つに対して鋭敏な触覚を有していることが翻訳者としても極めて大事な要件なのである。

和訳の先駆者たちと近年の状況

一八五三年（嘉永六年）に日米和親条約が締結されて、日本が鎖国体制を解いてから百四十六年、今日ほど国際コミュニケーションの道具としての英語が重視される時はないといってもけっして過言ではないだろう。

土佐の漁民のジョン・万次郎こと、中浜万次郎が宇佐沖で遭難し、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助されたのが天保十二年（一八四一年）。この十四歳の少年は、ほかの漁民がおどおどしているのに、ジョン・ハウランド号の人となってから何日かたったある日、自ら見張り役を買って出て、見よう見まねで、鯨を見つけて、「There she blows, a blo-o-ws!」（おすいぶくジラが潮をふごつるぞーっ）を発したのが、日本英学史登場の第一号。このとき、すなわち天保十二年から、すでに百五十八年の年月が経っている。

次いで、七年後の嘉永一年（一八四八年）に遠州灘で漂流した十三歳の少年アメリカ彦ことジョゼフ・ヒコらの一行が、アメリカの商船オークランド号に助けられた。しかし外人は俺たちをとって喰ってしまうとほかのものが脅えているのを知った船長が、最年少のヒコを船底の食料

室に連れていき、plenty, plenty, plenty…を連発して“plenty”イコール「たくさん」を初めての英単語として覚えたのが英学史第二号。

そしてハワイの上陸したヒコは、最初に会った人から、「可愛いー」といわれ、日本語のできる人に会えたと思って空谷の足音と驚喜したところ、なんと“*How are you?*”をまちがってとらえたことがわかってガッカリしたとの「誤解第一号」が発生してから、もう百五十一年の年月を積みしている。

さらにくだって安政五年（一八五八年）に来日したイギリスのエルギン卿が締結した日英修好通商条約を、オランダ通訳からイギリス語を独学で勉強して外国奉行支配通弁頭取となったMoriyamaこと森山多吉郎が、次のような（不平等な）条約のかなり立派な翻訳をしてから、百四十二年になった。

Article X

“All foreign coin shall be current in Japan and shall pass for its corresponding weight in Japanese coin of the same description.”

「外国の諸貨幣は、日本の貨幣と同種の同量を以て通用すべし…」

ひるがえって今日のグローバル化時代において日本の国際的に置かれた位置を見ると、一六〇〇万人以上の日本人が毎年海外に出かけ、四〇〇万人以上の外国人が来日し、

在外、日系企業数は一万六千社近くにも達し、海外に在留する日本人ビジネスマンとその家族、さらに現地で雇用する従業員とその家族を含めると、在外日系ビジネス・コミュニティの数は一〇〇〇万人にも達する時代である。

最近の調査によれば、今や、コミュニケーションの手段として英語を用いる non-native (生まれながらの英語使用国民でない人) の数が、native の数を上回っているし、世界六〇億の人々の中、世界の約五分の一の人々が、国際コミュニケーションの媒体として英語を用いる時代となったのである。

このことは、とくにビジネスの面においては著しく、自国語に対して誇り高きフランスの経営者も、マレーシアの政府高官も、ブラジルのビジネスマンも、英語を lingua franca (リング・フランカ=世界語) として使うようになっているのである。したがって、国際化するビジネスの世界にあつての英語は、今やイギリス人やアメリカ人の言葉ではなく、正に世界共通語になりつつあるのである。

かくして、朝日新聞論説委員の船橋洋一氏は、明治政府の森有礼文相のごとく、「英語を日本の公用語にせよ」との提言を行い、國引正雄エジンバラ大学名誉教授は、「英語必要悪論」を最近、唱えている。

もはや事態がここまで迫ってきた以上、英語能力、とくにコミュニケーション(通じる)能力の加速度的向上が望まれるのは当然のことである。

しかし、他方において、間違つた概念やその構文や観念体系を放置したままのグローバル化では誤解増殖と異文化乖離のプロセスを促進する恐れすらある。

また、千年以上の歴史と文化に裏打ちされ、一億三〇〇〇万人の人々の共通語である日本語の正しい位置づけと、それをまっとうな脈絡の下におくことの意義も大事である。英国の詩人アレキサンダー・ポープも喝破しているように、*To err is human, to forgive divine.* (過ちは人の常、許すは神の業) であり、今後とも誤訳は尽きぬといえよう。しかし error (過ち) や mistake (誤り) が failure (取り返しのつかぬ失敗) にまで繋がるぬよう、ここで再び先人の苦勞と努力にしばし思いを致すことも必要ではなからうか。

(産能大学教授)

経済学の時間・ヒトの時間

吉田 雅明

「恒久平和なんて人類の歴史上なかった。だから私はそんなもの望みはしない。―中略― 要するに私の希望は、ただだかこのさき何十年かの平和なんだ。だがそれでも、その十分の一の期間の戦乱に勝ること幾万倍だと思う。」

田中芳樹『銀河英雄伝説1』よりヤン・ウェンリーの科白

お上、理不尽！

経済学は社会科学の中ではとても奇妙な学問だ。社会科学は社会の振舞いのメカニズムを解明し理解しようとするものだが、経済学にはそういう気がないのではないかと思えるフシがある。そう考えるヒネクレ者は結構いるのだけど、根拠は人によっていくつもある。たぶん一番ポピュラーなのは、人間行動に関する想定の実現性だろう。

経済学という科学は、最適化行動と(市場)均衡という2つの概念をハードコアとしている。これは一般均衡理論の頃もゲーム理論全盛の昨今も変わらない。しかし最適化

とは可能な選択肢集合の中からその主体の効用関数を最大化する選択肢を選ぶことだ。これは2、3種の商品の数量の組合せから最適なものを選ぶときにはごく当たり前の主張にみえるが、塩沢由典氏が強調するように20種、30種(コンビニでもはるかに多くの商品群と対面する)とまなれば、その組合せ数は指数関数的に増加し、生物はおろかコンピュータでさえ手におえるシロモノではない(近似的最大化でよしとするなら、今度は需要関数が一意に定まらなくなる)。それを人間行動のモデル化の基礎におくなんて、ナニカンガエテンネン、というわけだ。

そこを理想気体みたいなものとかいって目をつぶり、各主体は全価格情報をもとに全ての商品についての需要・供給量を表明し、それらが全て等しくなるように価格調整が行われた状態を一般均衡状態と定義するだけならまだしも、現実がそこに向かうと考えたり、得られた実データをその反映と考えたりする傾向を経済学者はもっている。モデル上の一般均衡の存在・安定性証明は実に立派なものだけど、

素直に考えれば、もし一般均衡にいたる前の取引がそれぞれの主体の判断で本当に実行されてしまうと、想定された一般均衡へと状態が向かう保証はどこにもないことは想像がつく。(価格が動かさず取引可能数量情報だけが蓄積する数量調整タトヌマンでも同様である。)

一般均衡に向かうためには、ゴミ箱にティッシュを投げた外れたらもとの位置から入るまで投げるといように、当初の状態が繰り返し可能でなければならない。つまり、行為に関して時間が可逆的であることがモデルの前提になっている。時間が可逆的なら、先ほどの計算量の問題もなんのことはない、計算時間は無限に取れるので能力が有限であってもかまわないことになる。(ここですべての想定のない非現実性はどうでもよい、よい予測が出せれば出せないくせに―それでよい、というM・フリードマンの有名な非哲学的な議論があるのだが、不毛なので触れないでおく。) そんな奇妙な時間構造をもつ経済学に反発する人は昔からいて、J・ロビンソンは、歴史的時間(不可逆的時間)こそケインズ革命の核心だとして、変えることのできない過去とまだわからない将来との間の現在において意思決定を行う人間を捉えることが大切だと大見得を切って、これはこれでファンがいるのだが、やった仕事が歴史的時間を一貫して取り入れた体系とはいえなかったし、いかにせん、圧倒的な新古典派勢力の前には歯が立たなかった。そうはいっても、時間の可逆性を暗黙の前提とするのは、

経済社会を実システムとして取り扱う気があるならば、やはり相当ヘンなことだ。実システムというのは、現実的な構成要素による具体的なメカニズムによってシステム全体が無理なく動作する、現実的に構築可能なシステムをいう。処理に関して時間の可逆性を前提しないならば、システムの外部にリセット機構を設け、リセット前の状態を評価する外部記憶装置をおき、構成要素に行動修正シグナルを送ってやり、設計者の想定しない状態にシステムが陥ったならばリセットをかけるようにしなければいけない。これを外部の関連装置を含めたリソースをいささかも消費することなくやりおこななければ、近年のマクロ経済学者のよくやる手段、不合理性による排除、なんてことはできないのだ。これはまっさらに効率的なシステムを閉じた状態下に作るうというのならまだしも、既存の経済システムの振舞いを理解するために、制御可能な外部システムなんてアテにせずに、記述的にシステム・モデルを作るつもりだったら、まったくもっておかしな話だ(と、筆者は思うのだが、経歴上、同意してくれる経済学者は稀である)。

実システムを扱う経済学

気を取り直して、マトモな経済学の基本設計上の要件を考えてみよう。まず、構成要素にとってのリアルタイム・コンストレイント。構成要素にとってみれば、行動の際の情報処理時間も、タイミングも限られている。それに経済

社会くらい巨大な実システムの複雑さの前には、能力だつてしたものだ。だから処理に先立って必要な情報もシステム全域について要求するわけにはいかず、身の回りのローカルな入力でよしとするしかなく、それも有意義な計算時間で行う必要があるからいくつかの大小判定に還元できる程度の処理でなければいけない（定型行動もしくは満足化行動）。つぎに、システム全体にとつてのリアルタイム・コンストレイント。そんな部品から成り立って動きだしても簡単にはつぶれない、頑健性をもったシステム・モデルでないと、経済社会の分析に役立たない。

では、実現のための手立ては如何に。

このようなシステムが破綻をきたさずに運行できるためにまず必要なのは、なにはさておき構成要素単位で持つ処理バッファである。自動車のような機械系を考へてもすぐわかるように部品にあそびがなければたちどころにシステムは崩壊する。システムの頑健性の秘訣は、ルーズ・カットプリングであつて、ファジィの元祖ザデーが不適合性の原理として強調したように、価格情報に対して最適化行動をとるとか他の主体の戦略に対して最適反応するとかいうような打てば響く主体から成り立ったりジッドなシステムで最適制御を目指したのではダメなのだ。

もちろん、システム全体の効率性という観点からすれば、バッファがあればあるほどよいというものではない。しかしバッファを通常水準以下に抑えるためには、その主体を

含むサブ・システムの意識的な設計・制御が必要である。これは企業組織内ならばまだよいが、そのための合意形成が難しければ現実的ではない。また、システムが不安定なときに構造を維持するにはバッファをより多くとらなければいけない（昨今のセーフティーネット論議はシステム運営の観点からはこのように理解できる）。

ところで、構成要素がバッファを持っていたらそれでOKというわけではない。何のためのバッファかというところ、各構成要素がそれぞれ自律的に動いても破綻をきたさないためであつた。要素が中央指令を必要とせず、それぞれの判断で動作できるというのも、このシステムのよいところだ。中央指令がかつてのソ連で夢見た政府による統制であれ、ワルラスのオークション・ニアであれ同じことだ。経済社会というシステムの規模・複雑さに鑑みてそれを中央制御するというのは現実的ではない（ワルラスの御伽噺とかゲームの利得表とかがいかに中央集権的であるかは、それがどのようにして動作するシステムであるのか、システムマップを描いてみればわかる）。構成要素がローカルな情報に基づいて自律的に動きうるものがシステムに柔軟性を持たせて、崖っぷちに追い込まない秘訣である。

では、システム全体の頑健性はどうかやって保証すればよいのだろうか。それにはニューラルネットワークが大きなヒントになる。こんな部品同士が単一階層に配置されている相互結合ネットワークを考えてみよう。もっとも簡単な文字認

識システムのようには、これは安定点を含む多平衡系となる。平衡といっても最適化平衡ではもちろんなく、単に各要素が調整行動を起こさないというだけの意味しかない。頑健性はそれでいいとして、社会の状態がいづれかにとどまるだけじゃモデルとしてつまらないという不満も出るかもしれない。それは先にも触れた、各主体の自律的な調整の結果、定型行動の基準を変更させる主体が増えてくれば、システムの平衡マップ自体が大きく変容することになる。

かくして裏街道の経済学の基本設計は、バッファをもった定型行動を行う異種多数の主体が構成する並列処理系となる（これをかつてプロセス集積体系と命名したけど、残念ながら流行らなかった）。

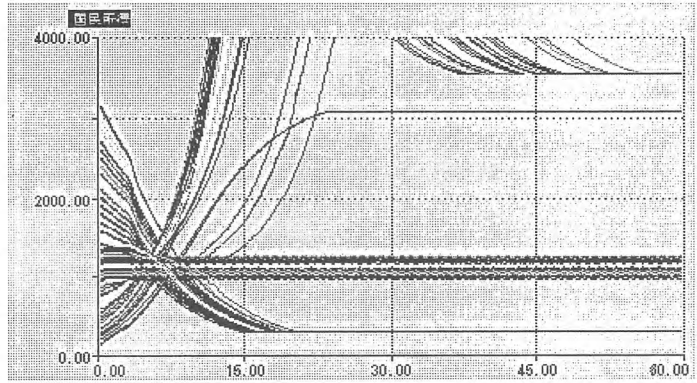
ちよつと練習問題

ではそれで経済学はどう変わるのだろうか。

たとえば入門マクロの一節（ここは同種類の定型的行動をとる人々を、消費財生産企業家群、給与所得家計群、等々と束ねることができるとして読んでほしい）。マクロ経済学はやたらと均衡条件を羅列するばかりでどのように具体的に動作するシステムなのか説明しないため、非経済学者には評判が悪い。通常、有効需要の原理は財市場の均衡条件とされるが、貨幣市場、労働市場、と均衡条件が並べられていくうちに、財市場の均衡といっても、独立な需要関数と供給関数のクロスで決まる均衡解という話ではな

いことがすっかり忘れられてしまう。もともとケインズが描いたことは、売上によって生産調整を行う消費財生産企業家群と、生産水準にリンクした雇用水準によって決まる所得から一定パターンで消費支出額を決めている給与所得家計群の行動を組み合わせたものだった。これは資本財生産部門の生産水準が途中一定であるならば、45度線図が教えるようにいかなる初期値からはじめようとも大局的に安定的に一定値に収束する。けれども資本財生産部門の生産調整行動を考慮し始めると経路によって収束先が異なってくる。さらに消費財部門の調整のおそびを考慮すると、システムの安定バンドは増加する。資産家群の行動もいれると行く方と経路は複雑さを増す（図を参照）。このような相互作用系を視野に入れてみると、政策の決定に今でも引き合いに出されるIS-LMは、システムのダイナミクスをほとんど把握していないことがわかる。意味のある政策を行いたいならば、初期値の把握、各部門のマクロ行動パターンの把握が急務であり、全域・全変数の長期間制御など高望みせず、ローカルで短期の制御を可能とする社会学を確立しなければいけない。

ものの見方について、たとえば結婚。結婚式では今でもよく年長者の（新郎側の）祝辞に、「内助を得てますますの仕事の発展を」、なんていうのがある。新郎が期待効用最大化の意味で合理的に行動し、かつ、その計算根拠となる確率分布に客観性があるならば、まあ妥当な発言かもしれない。



(横軸は時間。Stellaで作成)

れない。けれどそれはチャンチャラおかしいことぐらい
妻が献身的であるのが当然だった都合のよい時代の人、も
しくは個人的に超ラッキーしている人はいざしらずー大体
みんなわかっているはずだ。社会科学的に正しくは、「君
は十分なバッファを持つまでに成長したから、あ、もとも

とバッファギリギリの仕事なんてしてなかったかもしれない
いから、結婚くらいで仕事が破綻することはない。おめで
とう。それはときに負担かもしれないが、幸いにして人間
の効用関数には一貫性なんてないから、それがまた幸せに
思えてくることもあるぞ。よかったな。」というべきだ。

最後に、冒頭の引用のころを。「長期的に」という経
済学者の大好きなフレーズがある。それは理論的な経済学
者だったら非最適化状態がより多くクリアされた状態のこ
とをいったり、そうでない人なら理想状態の単なる表明だっ
たりするのだが、経済システムのダイナミクスを理解し、
社会工学としての経済学を構築するつもりがあるならば、
「長期」なんてことは目の前の「短期」の積み重ねでしか
ないことははっきりしているだろう。良心的に言えるのは、
われわれはローカルでうまくいってせいぜい数年までのシ
ステム制御機構を提案できるかどうかなのだと思う。長期
的な最適化均衡なんてこのシステムでは望むべくもない。
われわれの希望はただかこの先数年までの改善なのだ。
それでも根拠のないモデルに基づいて空想を語りつづける
よりは勝ること幾万倍とはいわないけど数倍くらいはある
と思うのだが、どうだろうか。

(専修大学経済学部教授

yoshida@isc.senshu-u.ac.jp)

日・韓・中における 大学出版部の社会的な役割を考える



小林 敏
辻 浩子

3国合同セミナーの司会を務める山下正団長。
(東京大学出版会・大学出版部協会幹事長)

「現在、韓国がハングル文字を使用している件については、韓国の政策的な問題であり、韓国における小・中学校の教育的な側面をも視野に入れたものである。従って、今後、徐々に漢字とハングル文字の併用政策はとられていくとしても、現段階では短絡的に漢字文化への移行を行うことは困難さがつきまとうのが現実。」韓国大学出版部協会の李光来氏（江原大学）は、淀みのない口調でそう答えた。明るい日差しが差し込むソウル大学の文化館国際会議室は『第三回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー』の熱っぽい空気に包まれていた。

私たちは、出版というものが、その国の文化を表象するものであるということを観念的には理解しているつもりであった。が、自国の歴史的な背景によって、自国の使用する文字にまで政治的配慮を余儀なくされる韓国という国の出版事情をどこまで理解できているか、という点になると言葉を失わざるをえない。私たちは、日本を発つ数日前、東京大学構内の山上市会館における《大学出版部協会ソ

ウル派遣団結団式」の席上で、訪韓の決意を口々にこう述べた。「現地の生活文化は、現地に行かないと理解できない部分がある。その国の文化や気質に直接触れることで韓国という国を少しでも理解したい」と。

しかし、実際のところ「その国の文化を知る」とは、どのようなことなのだろうか。出版というものが文化を反映させるものである以上、文化の異なる日・韓・中の大学出版部が共同で果たすべき役割とは具体的にどのようなものなのであろうか。私は、会議室の窓から見える美しい緑の樹々に視線を移しながら、そのようなことを考えていた。

一九九九年六月一日午前八時。私たち大学出版部協会のソウル派遣団は、成田空港第二ターミナルビルに集合していた。今回の訪韓団は、山下正大学出版部協会幹事長（東京大学出版部）を団長として、高橋一夫副団長（産能大学出版部）と山口雅己秘書長（東京大学出版部）という役員構成をとり、以下笹岡五郎氏（専修大学出版部）、末田博子氏（東海大学出版部）、田志口克己氏（東海大学出版部）、嶋田努氏（東京電機大学出版部）、そしてこの原稿を共同で執筆している小林敏（慶應義塾大学出版部）と辻浩子（東海大学出版部）の合計九名での編成となった。従来の海外派遣団に比較しても若いメンバーが目立つ編成である。大学出版部協会の三浦義博国際担当幹事（東海大学出版部）と原野勉協会副幹事長（東京電機大学出版部）、三浦邦宏

総務担当幹事（明星大学出版部）が心配そうに見守る中、私たちはソウルに向けて飛び立った。

初日のソウルは雨。『ソウル国際ブックフェア』も雨の影響で客足が鈍りはしないかと案じたが杞憂であった。百社を超える出版社の展示で賑わうフロアを見てみると、書籍に対する人間の憧憬というものは国籍を超えて存在するものだ、との確信が湧いてくる。

一夜明けて、私たちはソウル最大の書店である『教保文庫』を視察した。〈外国書〉のゾーンに並べられた協会加盟校の本は残念ながら全て古く、価格もウォンに換算すると大変高価なものになってしまっている。国際的な書籍流通の難しさを思わずにはいられなかった。

韓国滞在中も三日目ともなるとかなり慣れてくる。この日私たちは、予定されていた韓国放送通信大学の出版部を訪ねた。同出版部の出版管理局長金永道氏は、韓国放送通信大学の特色について詳細に教えてくださった。中でも学生に人気のある学科が電算学科であるという事実が、昨今の韓国のハイテクブームを反映させていて興味深かった。私たちは、会議終了後、出版部長の李鍾汶氏の勧めで韓国初代大統領李承晩氏が暮らした家を見学する機会に恵まれた。李鍾汶氏は真顔でこう言った。「日本人は、李承晩大統領の名前を忘れることは出来ないでしょう」と。その表情は複雑さをたたえていた。

その晩、私たちは、韓国大学出版部協会の招待で中国大



3 国合同セミナーの会場となったソウル大学校キャンパスには会議開催を示す立派な横断幕が張られていた。

学出版部協会のメンバーとともに本場の韓国料理を楽しんだ。夜がふけるのも忘れて肩を組み合い、酒を酌み交わす三国の大学出版人の光景に国籍が異なる意識は存在しなかった。

六月四日。私たちは、韓国大学出版部協会が手配してくれた大型バスで『第三回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー』の会場であるソウル大学校文化館の国際会議室に向かった。会議は、三国代表の挨拶から始まり、記念品交換を経て各国出版部のテーマ報告へと滞りなく移行していった。まずは韓国大学出版部協会の李光来氏が、「本は人間の考えを伝達するために考えられた道具」との大前提を打ち出して論を進め、「三国の大学出版部が共同で指向すべき座標について『漢字文化媒体のインフラ構築』の必要性」を論じた。この氏の論を受けた山口雅己秘書長は、日本側を代表して次の質問をした。「漢字文化媒体のインフラ構築」という言葉の意味は、将来的に韓国で漢字とハングル文字の併用を推進する、ということを意味しているのか。仮にそうだとすれば、漢字とハングル文字の書籍の割合は韓国の出版物の中でどのくらいになると予測できるのか」と。この山口雅己氏の質問に対する答えが本稿冒頭の李光来氏の弁である。

次に、中国大学出版部協会姚洪芳氏（中国人民大学出版社）が、「品質摺み、改革摺み、管理摺み」と題する発表を行った。氏の発表の中で「高品質の書籍は読者の要求」

としている点などは、我が国の出版事情にも妥当する事柄である。続いて日本側からは、まず高橋一夫副団長が発表を行った。「大学出版部の社会的役割―産能大学出版部の場合―」と銘打ち、特色ある同出版部の形態について論を展開したが、中でも「通信技術の進展や電子技術の活用を研究し、場合によっては製本印刷物でない出版にも眼を向けていく」とする新規事業の開発という部分については韓国のみならず中国側の強い関心も浴びていて聞きごたえのあるものであった。

昼食をはさみ、午後の部は山下正団長の司会で再開された。韓国大学出版部協会の権英子氏（ソウル大学出版部）は、「大学出版部の社会的貢献と企画出版」という視点から論を進めた。氏のオックスフォード、ケンブリッジ、ハーバードの各出版部を例に引いた検討は実に圧巻であった。続く中国の徐志偉氏（復旦大学出版社）の発表は「大学出版部の役割及び地位」というテーマ。そもそも人口に恵まれている上に、開放政策のもとで良質な労働力育成のための教育機会が拡大傾向を見せ続けているという中で中国の出版事情を反映させてか、「中国大学出版社はこれからも発展」と胸を張ったのが印象的であった。そして今回のセミナー発表のトリをつとめたのは山口雅己秘書長であった。氏は「大学出版の社会的役割」と題する論の中で、日本の大学出版部が学術出版に対する財政的援助を与えられていない現状について言及し、その上で一九五八年に設立

した学術書刊行基金の存在について触れた。氏は明言する。「良書を蓄積することによって受ける利益を通じてのみ、大学出版部はその理念を実現することが可能なのであり、大学ひいては社会に対する使命を果たすことができる」と。

各国の事情はそれぞれに説得的である。問題はこれらの課題を明日につなげる英知をどう持つか、である。パッションという言葉は情熱という意味の他に受難という意味をも含むという。『二十一世紀の大学出版のありかた』……この大きな命題の「受難」に対し、私たちが情熱を持って臨む時、三国の大学出版部は文化の隔たりを超えた社会的な役割を共有しうるのかもしれない。

この命題は、二〇〇〇年に日本で議論される。

（第三回 日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー

訪韓団員 慶應義塾大学出版会、東海大学出版会）

自動車文明の象徴であったとき

トヨタ博物館を訪ねて



トヨタAA型乗用車

トヨタ（自動車）博物館を訪ねてみた。つまらなかつた、と以前なら思ったかもしれない。しかし、昨年来『アメリカン・システムから大量生産へ』と『豊田喜一郎文書集成』という本を作ったこともあって、かなり楽しめた。ここでちょっとその本の宣伝をさせていただくなら、前者は、ハウンシェルというアメリカの学者が、フォードの大量生産システムの形成にいたるプロセスを描き出した技術史の傑作で、後者は、読んで字のごとく、トヨタ自動車の創設者にして（日産の鮎川義介と並んで）日本の自動車産業を創出した豊田喜一郎が書き残した文書を集めたもの。喜一郎は筆まめな人で、様々な機会に、こちらが知りたいと思うような事柄を実によく書き残しておいてくれたのである。

実はこの『文書集成』の編纂にあたって、打ち合わせのため何度か博物館にも出かけていたのだが、展示物をちゃんと観たのは今回がはじめてなのである。

博物館を簡単に紹介しておく、全体は本館とオープンしたばかりの新館からなり、本館の方は、世界と日本の自

動車の歴史が一望できるように、新館の方は、日本の、特に戦後の生活文化との関連で自動車が表示されている。

本館を入るとすぐトヨタAA型自動車が視界に飛び込んでくる。『文書集成』の口絵にもその写真を使った、トヨタにとって記念碑的な第一号乗用車の完成型である。文明の象徴として自動車をとらえ、それを日本人の手で作りに上げる（「国民車」）ことに心血を注いだ喜一郎の努力がまざまざと結晶したものだ。その格闘の跡を垣間見るには、同じトヨタ系の産業技術記念館を訪ねた方がよいのかもしれないが、ともかく、現在から見れば欠陥だらけのこの乗用車を工業製品として生産するには、産業全体を創り出していく途轍もない努力が必要とされたのである（例えば、車体に使う鉄板にしても適当な薄板が国内では手に入らず、結局ボディ用の薄板は輸入することにしたが、特殊鋼については社内に鉄鋼部を設けて自給しようとしている）。喜一郎は、たしかに様々な原価計算を行い、冷静な経営計画を立てたりもするのだが、やはり根本のところ彼を突き動か

していたのが、経済的な合理性などではなかったことが察せられる。そして、この「日本人好み」と言ってよいのかもしれない姿勢に、つい感動してしまえるのである。

さて、そのAA型自動車を紹介してくれる美人のお姉さんに別れを告げて、二階に上って行くと、そこには誕生したときから現在にいたる欧米の車が、復元も織り交せて順に展示してある。『アメリカン・システム』の本を作ったせいもあって、アメリカ車ばかりが念頭にあったが、当然のことながら英・仏・独・伊など様々な国の、しかも実に美しい自動車がいっぱいである。王族の乗る馬車のようなもの。いわゆる「クラシック・カー」という感じのもの。ギャング映画に出てきそうな車。とにかく今日の日本(的な)車に慣れた眼からすれば、異様に大きい。それから、ありました、フォードT型自動車、大量生産システムの申し子。写真では何度も見ているが、現物を見るのはこれが初めてだ。先ほどの豪華な馬車のような車からすれば確かに小型で素っ気ないが、それでも私の貧乏性な感覚からすれば十分立派な代物である。このT型車が誕生するまでの曲折に満ちた技術の集積過程と、それが陥った袋小路に思いを馳せたところで、あとは駆け足、三階へと移った。

上ってすぐのところでもたもや存在を主張しているAA型の横を通りすぎると、フロアーには、日本の自動車の歴史を辿れるよう古いものから順に車が展示してある。ここでは、ダットサン(大衆化した最初の四輪小型自動車)と

ダイハツ・ミゼット(オート三輪の代表的存在)の小ささに心を捉えるものがあったことを記しておこう。あれこれの車を眺めていくうちに、実は一緒についてきてもらっていた妻が、「これ、私が初めて乗せてもらった車!」と言いだした。スバルの小さな車で、確かにこんな形の車が道を走っていた光景が記憶に蘇ってくる。少年時代へのノスタルジーを少しかき立てられたところで、次は新館へ。

新館は、先ほども書いた通り、戦後を中心に、車を取り囲む日本の生活文化を代表する品々が、当時の車とともに展示されている。特に六〇年代、七〇年代の、家電製品から雑誌(『冒険王』もあった)、おもちゃ(足が短い小型のリカちゃん人形)、レコード(若き日の誰その顔がある)等々と見ていくと、しばし時間を忘れてしまう。……

自動車と格闘した喜一郎の軌跡を見ようと思っ
て出かけてきたこともあって、すっかり出来上がった自動車の歴史とその配列は、いささかきれいすぎるような気もしたが、それはともかく、結局最も印象に残ったのは、アメリカの車の巨大さと、それをそのまま輸入するのではなく、自前の車を作り上げようとした起業家の、なんとも不可解なようで、その実とても馴染み深い「意志」の姿であった。

(名古屋大学出版会・橋 宗吾)

トヨタ博物館の詳細は、電話〇五六一一六三一五一二かホームページ <http://toyota.co.jp/Museum/index-j.html>。

大学出版部 ニュース

付・ウェブ上の大学出版部2



第4回拡大編集委員会。宮田昇氏(左)。

▼第四回拡大編集委員会開催

七月二日(金)～三日(土)、東海大学山中湖セミナーハウスにて「第四回拡大編集委員会」を開催しました。

今回は、講師に宮田昇氏(日本ユニ著権センター代表)をお招きして「著作権をめぐる諸問題」という題目でお話いただきましたが、著作権の問題は広範囲にわたるので、内容を「引用・海外著作権・出版契約」に限定。著作権の基礎知識にひととおりふれた後に、各大学出版部が持ち寄った具体的事例を解説するという二部構成の研修会でした。

閉会后、宮田氏は「同じような問題でも、裁判によって結論が違うというのはよくあるんですよ」とボツリ。結局、著作権の問題は法をどう解釈するかということに行き着くので、複雑な要素が絡めば絡むほど、何が絶対正しいという結論はみいだせないということのようです。

つまりは、裁判沙汰になる前に、編集者自身が理論武装できるだけの知識と判断力を養っておく必要があるということでしょう。

参加者二名。過去最高の盛況ではありましたが、初めて首都圏の大学出版部のみの集まりともなりました。もともと「拡大編集委員会」の開催理念は、「日頃顔を合わすことのない全国の大学出版部も取り込む」ところにあったはず。スケジュール、開催場所など難しい問題は多いでしょうが、来年以降は当初の理念への立ち返りを図りたいものです。

▼「付・ウェブ上の大学出版部 第二弾 昨夏、本誌三八号にて、一四大学出版部のホームページ紹介を掲載しましたが、本号ではそれ以降に立ち上げられた専修・電大・早稲田の三大学出版部のウェブサイトを「ニュース」につづけて紹介いたします。

北海道大学図書刊行会

▼M・アメリク著・上平初穂他訳『男装の科学者たち―ヒュパティアからマリー・キュリーへ』(四六判・二四〇〇円) 名前を変え、姿を変え、ときには夫や知人の成果を公表する……。自然科学を志す女性達が克服してきた差別や偏見の実例と背景を丹念に追究。▼T・ベッサー著・鈴木良始訳『トヨタの米工場経営―チーム文化とアメリカ人』(四六判・三二〇〇円) アメリカ人従業員は日本型経営をどう受けとめたか。詳細な面接調査に基づき、冷静かつ公平な視点からトヨタシステムの移植と変容に迫り、日本型経営の普遍性と特殊性を説明。▼ジャコービ著・内田一秀他訳『会社狂園制―アメリカ型ウエルフェア・キャピタリズムの軌跡』(A5判・七五〇〇円) 脱労働組合化が急速に進行するアメリカの労使関係を、「会社」という領土が従業員達を庇護する制度としてとらえ、その原点を、二〇年代に求めた歴史的研究。▼杉村光俊・石田昇三他著『原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑』(A4判・六〇〇〇円) 全二四種・亜種を三六〇〇枚を超える色鮮やかなカラー写真で収録。

聖学院大学出版会

▼後藤兼一『オフィス業務改革』(二二〇〇円、A5判並製、一七六頁)

日本の工場では、業務改革が進み、生産性、創造性の高いファクトリ業務が実現し、国際競争力のある企業が生まれてきた。それに対して、オフィスの業務改革は、なかなか進まず、欧米の企業が進めてきたオフィス業務改革に大きく差をつけられ、生産性のみならず創造性においても遅れをとり、これからのグローバルスタンダードに適応できない企業が多く出ることが危ぶまれている。

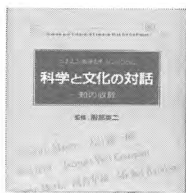
著者は、オフィス業務改革が進まなかった根本的な原因であるオフィス業務の「不可視性」を指摘し、オフィス業務を誰の目にも可視的なものにする、業務改革を提言する。それは、オフィス業務のアクティビティとコストの関連に注目したQVA、ABC (Activity Based Costing) と ABM (Activity Based Management) との最近注目されている理論である。本書では数社の適用例を示しながら、日本のオフィス業務の改革改善の方法を提示する。

麗澤大学出版会

▼(ヘユネスコ・国連大学シンポジウム) 服部英二監修『科学と文化の対話―知の収斂』(本体四五〇〇円)

大乗仏教の哲理、特に曼陀羅思想と、量子物理学の最先端研究が一致点を見出した。――これは本書に収録したユネスコ東京シンポジウムの共同宣言として発せられ、世界に大きな波紋を起こした。

科学と精神文化の乖離――これこそ二十一世紀に向けて超克すべき課題であるとする東京シンポジウムには世界の錚々たる学者・知識人が参加した。地球環境学のジャック・イヴ・クストー、社会学のエドガー・モラン、量子物理学のヘンリー・スタップ、心脳理論のカール・プリブラム、日本から大江健三郎、中村雄二郎、河合隼雄、鶴見和子等。特に、中村、河合両氏は先覚的かつ刺激的である。



『科学と文化の対話
―知の収斂』

本体 4500円(税別)
A5判・上製・320頁

慶應義塾大学出版会

劇団四季主宰の演出家・浅利慶太の初めての本を全4巻で刊行する。

▼『浅利慶太の四季 著述集1 演劇の回復のために―演劇論集』(三二〇〇円)「演劇は失われました」そう語った二十二歳の青年・浅利慶太が目指したものは何なのか? 処女論文「演劇の回復のために」を発表以来、常に演劇の革新を実践しつづけてきた著者の、一九五四年から一九九八年までの演劇論の集成。

▼『浅利慶太の四季 著述集2 劇場は我が恋人―演出ノート選』(三三〇〇円)劇団四季旗揚げ公演作から、『キャッツ』を始めとする数々のミュージカル、四季劇場「春」「秋」の柿落しに至るまでの舞台を浅利慶太の演出ノートで語る。

▼『浅利慶太の四季 著述集4 21世紀への眼差し―現代社会考』(二四〇〇円)独自の観点から社会や教育のありようを直言、二十一世紀へ向けて発せられる現代社会考。

▼十月刊行の『浅利慶太の四季 著述集3 伝統と現代のはざま―文化・芸術展望』(二四〇〇円)で全4巻完結。

産能大学出版社

▼『MBA経営キーコンセプト』（鶴岡公幸／松林博文共著、一八〇〇円）MBAこそがビジネススタンダードとして国際企業に認知されつつある。この不況期にも関わらず、欧米のビジネススクールへの留学希望者が増加の一途であることから、MBA熱の高騰ぶりがうかがえよう。MBA用語を重要な一〇〇項目に絞り、最新のトピックスも盛り込みながら解説している。MBAのキーワードには全て英語を併記し、MBAの実感が体感できることも大きなポイントである。

従来のMBA関連書籍は、初心者にとって難解で、ハンディーなものではなかった。本書は、学生、新社会人にも役立つMBAの入門書として最適である。

▼『越えられない人生のハードルはない』（池田好隆著、一八〇〇円）人生にはいくつもの困難なハードルがある。ことに精神の異常、破産、放校、失職等は越えることのできなない大きな壁として私たちの前に立ちはだかっているように見える。しかし、これらの壁も、もの見方を変え、意識を転換することによって、私たちに新しい人生をもたらしてくれる。

専修大学出版社

▼田邊信太郎・島蘭進・弓山達也編『癒しを生きた人々』（二二〇〇円）明治・大正・昭和初期にかけて、近代医療でなく、かといって漢方に代表されるような伝統医療でもない、もうひとつの体と心の実践を追求した人々がいた。近代化の進展と矛盾のなかで生きた彼らの思想と行動に焦点をあて、今日の癒しの源流を探る。主な登場人物は、マクロビオティックと呼ばれる食による健康運動を展開した桜沢如一、日本独自の精神療法である森田療法を創始した森田正馬、「氣」の力を用いて人間の自然治癒力を呼び覚まそうとした野口晴哉、岡田式静坐法の岡田虎二郎などである。

▼松岡誠之助『商号の研究』（三四〇〇円）経済社会の根幹である資本主義的企業の名称である商号。商号は商法によって規定されているが、諸問題に対処するに充分とは言えない。本書は、その商号制度の法的意義を総合的に把握する。とともに、複雑かつ多岐になってきた商号に関する法的諸問題にも言及して、その解明を試みている。商号に関する理論的研究の、一つの集大成と言ってもいい。

玉川大学出版社

▼成川武夫著『芭蕉とユーモア―俳諧性の哲学―』（二八〇〇円）

芭蕉は脱俗的求道精神に貫徹された真面目一辺倒の詩人だったのか。蕉風の詩精神に内在する滑稽性・アイロニーに注目。上質の笑いであるユーモアの意味を解き明かし、新しい芭蕉観を提示する。

▼『神祕を彩るアイコン―リーナ・デルペーロ現代イタリアのアイコン作家、リーナ・デルペーロが生みだした三〇〇を超える作品のなかから四六点を精選し、聖書の事跡の順に紹介。各作品のテーマとなっている聖書のテキスト、アイコンの歴史、制作技法を日・伊・英三カ国語で解説。



中央大学出版部

- ▼田中茂次著『会計深層構造論』（五五〇〇円）複式簿記の基本構造から、貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書まで、企業が作成する財務諸表の基本的な計算構造や生成過程を明快に解明。また深層構造論に基づき、伝統的な勘定理論の系譜の中で、主にドイツや日本で主張されてきた様々な勘定学説を批判し、新しい会計観への転換を提唱。
- ▼OBCD編／鹿島茂、W・ヘイス、谷下雅義訳『環境政策の便益―貨幣評価―』（一九〇〇円）環境政策によって改善される環境への効果を貨幣単位で評価する手法を紹介。欧米諸国の具体的な事例も豊富で、環境問題や環境政策に関心を持つ学生や実務担当者にとって最適な入門書。
- ▼松本正徳著『日本労務管理史―北海道の炭鉱の事例を中心に―』（四四〇〇円）日本帝国の軍事的敗北と産業対策の破綻による日本の労務管理の終焉からアメリカの労務管理方式を取り入れながら再編・再生するところまでを視野に入れた、戦前、戦後における北海道地方の炭鉱での強制連行労務者（朝鮮人・中国人など）の労務管理を詳細に追究。

東海大学出版会

- ▼岩崎敬三著『貝のパラダイス―磯の貝たちの行動と生態―』（二八〇〇円）

貝にとって自由気ままに暮らす「磯」は、まさにパラダイスである。パラダイスである磯で貝たちが繰り広げる生活の賑わいと、さまざまに凝らされた生きるための技と工夫など、貝たちの生態と行動を垣間見る。貝の不思議に迫る一冊。

目次

- 貝たちの住環境
- 貝たちの摂食活動と食糧事情
- 貝たちの防衛論
- 貝たちの繁殖と稚貝の分散
- 脅かされる貝のパラダイス



東京大学出版会

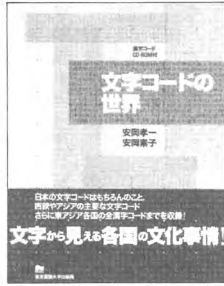
「社会とは、いくつもの齟齬感や違和感や、隔たりの意識が複雑に交錯しあう苛酷な空間にほかなりません。今年の東大入学式の総長式辞は、その長さや難解さゆえに多くの新入生を戸惑わせ、さかんにメディアに取り上げられて話題になった。蓮實重彦「齟齬の誘惑」(四六判、二〇〇〇円)はこの入学式式辞を中心に、九七年四月の総長就任以後、様々な場所で行われた講演・挨拶をまとめたもの。

大学という空間で求められている身振りは、安易なうなずきあいでの摩擦を回避することではなく、他者との解消しようのない齟齬感を受け入れ、「異なるもの」への新鮮な驚きを生成しうるしなやかに開かれた好奇心である、と説く。

東大総長という制度の頂点にありながら、自らの「公式の立場」を相対化し、硬直したアカデミズムの知を解き放つとする、示唆に富むメッセージ集。文京区主催で行われた講演「小津安二郎―日本映画の海外の評価」も収録。文学者・映画評論家である著者の、比類なき感性によって紡ぎ出される言葉を、大いに楽しんでいただきたい。

東京電機大学出版局

パソコン・ワープロを使うほとんどすべての方は、何度か「出ない文字」と格闘したことがあるはずだ。それは膨大な時間を経てきた文化と、まだ日の浅い技術が出会うときの歪みである。中国の簡化字などを含めると、東アジア諸国には数万にも上るコード化された漢字があるのだが、そこからすらも漏れた漢字がまだ山ほどあるという。



『文字コードの世界』

本体 3600円(税別)
B5変判・210頁
漢字コードCD-ROM付き

そこで、情報のデジタル化に際しどの程度までの漢字にコンピュータ上での約束事である文字コードを与えるかということが、現在論議されているのだ。著者らは、その選択の仕方、その国の文化的背景が透かし見えるという。本書にはヨーロッパの文字コードから、その漢字コードまでのすべてを収録してある。

東京農業大学出版会

おすすめ書籍紹介

▼「名園の見どころ」

河原武敏著(一七四八円)
日本庭園一六〇を解説したもの。名園の場所や、園内の平面図を掲載しており名園鑑賞する方は、是非一冊携帯を。

▼「モンゴル一〇〇の素顔—もう一つのガイドブッカー—」
(一五〇〇円)

一般の旅行案内では得られない、モンゴルの情報を提供する目的で編纂されたもの。写真を中心に、文章も平易にまとめられている。モンゴル旅行の際には、心強い味方となると思います。

▼「野菜栽培あれこれ」

米安 晟著(一四五七円)

50年間の野菜作りの実践と研究から、まとめたもの。著者の経験談を交えた読み易い文体で、内容も豊富。野菜作りや家庭菜園を行っている方には、参考になることが盛りだくさんです。

▼「盆栽技術入門」

榎松 敬著(二七四八円)

盆栽を始める人のための入門書。樹形の基本から、用具、樹木の選び方など、ていねいに解説されている。

法政大学出版局

▼「バーバラ・M・ソークス／藤森和子訳『両手いっぱい—不治の病に』」

「おかされた子どもたちの心の記録」
不治の病におかされた子どもたちは、いかに生きていけばよいのか——絵画などの創作活動や動物のぬいぐるみを独創的に使った自己表現活動を通して子どもたちの内面に迫り、対話のなかで問題点を明らかにしつつ解決の糸口をさぐる。

「かわいそうな〈死にゆく子どもたち〉としてではなく、〈病気とともに生きる子どもたち〉の勇気を感動的に描くとともに、サイコセラピストやライフ・スペシャリストの役割、インフォームド・コンセントの意味をも明らかにする。」
四六判二四八頁十口絵八頁／二三〇〇円



放送大学教育振興会

▼北海道・福岡の各学習センターに、それぞれ学習センターのランチ・センターの機能をもつ「旭川サテライトスペース」（旭川市常磐公園内・青少年科学館）、「北九州サテライトスペース」（北九州小倉北区城内4-1・視聴覚センター）が新設され、六月より利用開始。

▼平成十年三月の学校教育法施行規則の一部改正により、高等学校の生徒が大学の科目等履修生として修得した単位を、高等学校の単位として認定できるようになった。こうした状況を踏まえて、放送大学においても平成十一年度第二学期からは、入学する年度の学年の初めにおいて満十五歳以上の者（義務教育修了者）であれば、選科・科目履修生として入学できるようになった。「大学に高校生がやって来る」時代となるわけである。

▼七月九日、千葉市・ホテルグリーンタワー幕張において、平成十三年度開設改訂予定科目の主任講師会議が開かれた。専任教員・客員教員、ディレクター、編集担当者等が、全体会議、専攻別部会に出席した。これで平成十三年度印刷教材編集作業が正式にスタートした。

明星大学出版部

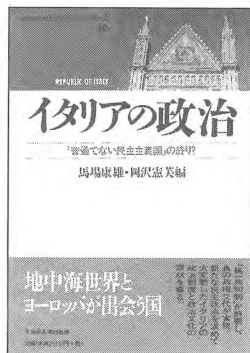
▼神辺靖光著『教育史散策』。四十年余の教育史研究とともに、中・高・大学で教鞭をとってきた筆者の、世に訴えようとする思いをまとめた珠玉の書。

大学院在籍中、学資を得るために杉並区にあった私立城石中学・高等学校の講師となった筆者は、戦後のアメリカ化一辺倒の時流の中で、威武に屈することなく、孔孟の道を説いた河野通彌太校長に傾倒。河野校長との明治の私塾・私学の反骨、独立精神についての談論が、生涯をかけた教育史研究の端緒となる。昭和四十二年、大学教員のまま財団法人日本私学教育研究所の兼任研究員となり、教育史研究の中で最も手薄だった中等教育史を専攻。昭和戦前期の旧制中学校を舞台としたドラマ「はっさい先生」（NHK放映）の監修者となって全国に紹介される。なお、私立東京文化高等学校の主事として、卒業生や父母を前にした講演や朝礼での訓話、私立中学・高等学校教員のための講演「中等教育史と慶應義塾」「近代日本の学校と私学」も収録。日本の教育を知るうえに手軽な書になっている。

早稲田大学出版部

▼「忍び寄る感染症―二二世紀の人々に待っているものは？」（町田和彦、二六〇〇円）結核、寄生虫、エイズをはじめ、身近に潜む危険を予防するための基礎知識をわかりやすく解説する。

▼「叢書ワセダ・リブリ・ムンディ」③「イタリアの政治―「普通でない民主主義国」の終り？」（馬場康雄・岡沢憲美編）、④「イタリアの経済―「メイド・イン・イタリア」の生み出すもの―」（馬場康雄・岡沢憲美編）、⑤「イタリアの社会―遅れて来た「豊かな社会」の実像―」（馬場康雄・奥島孝康編）〔各二九〇〇円〕は、第一線の研究者・ジャーナリストを著者に迎え、財政再建とEU統合を推進するイタリアの現状を、斬新な視点からとらえる決定版。



名古屋大学出版会

- ▼望田幸男他編『西洋近現代史研究入門「増補改訂版」(三三〇〇円)「周辺」地域を含めた諸国の政治・社会から家族・女性史、生活・文化史にいたる西洋近現代史研究の基本視角、その主要問題群と代表的文献を案内した研究入門の最新版
- ▼池上俊一著『ロマネスク世界論』(六五〇〇円)ヨーロッパの本質が形成されたロマネスク期の心的世界の構造を、思考・感覚・感情・霊性・想像の五つの側面と、現実社会との相互作用から解明した全体史の試み。
- ▼上田実編『ティッシュ・エンジニアリング―組織工学の基礎と応用―』(九〇〇〇円)組織工学は医療に新しい展望を与えるものであり、研究が急速に進んでいる。本書は基礎生物学的情報を網羅し、臓器再生の臨床を念頭において培養臓器研究など、最新知見を提示する。
- ▼米山優著『モノドロジエの美学―ライプニッツ／西田幾多郎／アラン―』(五八〇〇円)等閑視されてきたライプニッツ单子論の美学的側面の豊饒さを明らかにし、情念論・心身二元論などの再考を通じて西田・アランと切り結び結ぶ労作。

京都大学学術出版会

- ▼『人間性はどこから来たか―サル学からのアプローチ―西田利貞著・二八〇〇円／たとえば戦争報道を見て、人はなぜ争いを繰り返すのか? と問う。あるいは女房と喧嘩して、人はなぜすれ違うのか? と溜息をつく。はたまた……。いつの世も人は愚かだったのであるが、果たしてそれはヒトが人だからなのか? 否、それらは悉くサルに見られるのだ。
- ▼『陸水学』A・J・ホーン／C・R・ゴールドマン著／手塚泰彦訳・七八〇〇円／湖沼や河川など陸内水圏の物理・化学・生物を研究する総合科学・陸水学の本格的総説書。底本となった第二版は一九九四年刊で、この分野では最新のもの。また、国内には類書は全くなく、多くの研究者・学生にとって待望の書である。
- ▼『地域間研究』の試み(下)―世界の中で地域をとらえる―高谷好二編著・四二〇〇円／地域を地球全体の座標の上に置き比較することで、その外郭と実質を明らかにする地域研究の新しい方法。下巻は、中国とヨーロッパを扱う。併せて地域研究の今後の課題をも示す。

大阪経済法科大学出版部

- ▼『フランス労働争議強制仲裁制度―一九三六年〜一九三九年―』ジョエル・コルトン／向井喜典監訳・岩村等他訳(A5判・二七〇頁・四五〇〇円)三六年人民戦線ブルム内閣により成立した労働争議強制調停仲裁制度を成立の前史から実施の諸過程を経て、第二次世界大戦による停止まで実証的に解明されている。原書は欧米の経済史・労働運動史・労働法の分野で絶賛された名著であり、今も研究書として高い評価を受けている。
- ▼『満州事変前夜における 在間島日本総領事館文書 上』大阪経済法科大学間島史料研究会編(A5判・函入り・八四〇頁・二五〇〇円)本書は故・伊地知吉次間島副領事が収集・記録した資料を項目別に分類整理し、解説を加えたものである。収集資料は伊地知が勤務したの間島総領事館文書を中心に鉄嶺領事館・広東総領事館文書等、明治初期から昭和初期の満州事変前夜の数ヶ月間までおよび貴重な資料でしめられている。上・下二巻に分けて刊行することになったが、既存の歴史資料を補完する日本近現代史研究に必携の文書資料と確信する。

大阪大学出版会

西欧(世界史)の視点からする綱吉像は「偉大で卓越した支配者」であった。

▼B・M・ポダルトロベイリー、D・マサレラ 編/中 直一・小林早百合 訳

『遙かなる目的地―ケンペルと徳川日本の出会い―』四六・三五〇〇円 十八世紀西欧知識人層でベストセラーになった『日本誌』とその著者ケンペルについての最近の研究成果。ケンペルと綱吉は、元禄時代、実際には三度しか会っていないが、同時代の誰よりも、〈近代〉という遙かなる地平を見据えていた。

▼脇田晴子、A・ブッシイ、上野千鶴子 編著『Gender and Japanese History (Vol. 1)』菊判・七四〇〇円 第二巻は既刊(八四〇〇円)。ようやく完結。

▼鬼原俊枝『幽微の探究―狩野探幽論』(一九九八)が「第10回・國華賞」に続いて「1999/Shimada Prize」を受賞した。本賞は、中国・日本美術の研究者「高田修二郎博士」を顕彰して創設、東アジア美術史分野の出版に与えられる。主催はスミソニアン・フリエギャラリーほか、今回の審査委員長はハイデルベルグ大学のロザリー・レドローズ教授。

関西大学出版部

▼諸澤巖ほか著『遠来の客』(一四〇〇円) 日独英三言語による歌仙式連句。連衆は日独英米の十人で、三言語四文化十個性の交流と摩擦の記録である。客はデルシウトゥットガルト大教授、扱きは乾裕幸関大教授、亭主は諸澤巖関大教授。恐らくは世界初の試み。▼石田浩著『アジアの中の台湾』(一五〇〇円) 台湾は中国を映し出す鏡である。台湾の動向を注視していると中国だけでなくアジア世界も見えてくる。本書は著者の二十数年に及ぶ台湾研究の蓄積と、台湾の学者を通じて培った目で台湾の過去・現在・未来について考え、日台中の将来に対して熱い思いを馳せた好著である。▼C・カイトリ著・和田葉子訳『中世ウェールズをゆく』(三三〇〇円) ジェラルド・オブ・ウェールズの著した『ウェールズ旅行記』に従って一一八八年、彼がカンタベリー大司教ポールドウィンと行った十字軍の戦士募集キャンペーンの足跡をたどる。この「十二世紀最大のエゴイスト」と称された人物の数奇な人生とウェールズ各地の今昔を全ページ美しいカラー写真で余すところなく紹介する。

九州大学出版会

▼アルトゥール・カウフマン/甲斐克則 訳『責任原理―刑法的・法哲学的研究』(A5・五一〇頁・八五〇〇円)〈法と国家〉翻訳叢書の第四冊目。本書は、アリストテレス、トマス・アクィナスらにより確立された伝統的な存在論哲学を踏まえた法存在論の観点から、刑罰の前提となる責任の中核原理である責任原理について刑法的観点および法哲学的観点から根本的考察を加えた、今世紀を代表する刑法哲学の古典的名著。▼津守常弘編『現代会計の国際的動向と展望』(A5・二八〇頁・三八〇〇円) 本書は、EC指令を典型とする会計規範(基準・法令)の国際的調和化という新しい現象との関連で先進諸国における会計計算と公開制度の変化を、会計理論・会計制度・会計実務という三つの側面から分析を行っている。▼清水孝純『闇の王国・光の王国』(四六・三三六頁・三三〇〇円)『カラマゾフの兄弟』を読む―全三巻予定の第二巻刊行。▼鈴木広編『災害都市の研究―島原市と普賢岳』(A5・四〇六頁・六六〇〇円、九八年二月刊)第一回日本都市社会学会賞(磯村記念賞)受賞。

東北大学出版会

▼『医学書』中村正三著『髄液細胞診』(A4判・八六頁・四五〇〇円) 細胞診を、髄液中の種々の細胞を形態のみならず機能的側面を含め観察し、そこから中枢神経系内で惹起されている病態を把握し、診断や治療効果など日常臨床に役立つ補助的検査と考えている著者が、貴重な経験の積み重ねから著した研究書。多種多様な病態においての細胞診所見が克明に示されている。中枢神経疾患の病態把握及び診断の必携書。「患者は私たちに刻々変化する徴候や症状で語りかけている。髄液細胞も脳内での刻々変化する出来事を私たちに語りかけている。」(本文より)

▼高橋滯子著『心の科学史―西洋心理学の源流と実験心理学の誕生』(B5判・上製・二九七頁・五〇〇〇円) 本書の狙いは、今日の、いわゆる『科学的』心理学を支えている方法論と認識論の歴史的な成立経過を明らかにすることである。現代心理学を特色づけているものを、他の時代のそれとの比較を明らかにし、『明日の心理学』に何が可能であるかを考えるための糸口や資料を提供する。

流通経済大学出版会

▼『笑いに勝る良薬なし』(R・ホールデン/荘司治訳・二二二頁・一八〇〇円) 私達は、歌を忘れたカナリヤならぬ「笑いを失った人間」になってしまったように思うのです。あなたが最近乗った電車の中や、通勤途上の街角の光景を、ちょっと思い出して下さい。難しい顔をした人や不愉快そうな顔をした人が何と多いことでしょう。

確かに、近頃是不況による会社の倒産やリストラ、学校でのいじめや学級崩壊、子どもに対する親の虐待など暗いニュースが身の回りに溢れています。

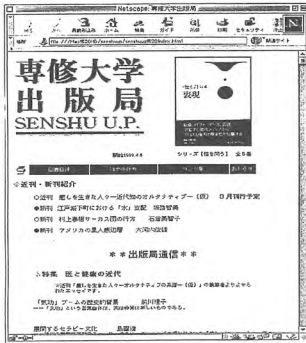
しかし、こんなご時世だからこそ「笑い」が必要なのではないかと思うのです。本書の著者R・ホールデンは、英国で最初に「笑いのクリニック」を開設した人です。ここでは、「幸せの追求、楽しい生活の技術、楽しい考え方、心の中の微笑、遊びの治癒力、幸せな人間関係」などのゲームを通して、自然に笑いの大切さが体験できるようプログラムが設定されています。

彼は、「健康であるためには先ず楽しくなければならぬ」と断言します。

三重大学出版会

▼都築正則/シユテファン・トゥルンマー共著『ドナウ河ドイツ語の旅 改訂版』(一五〇〇円) 大学一年生の大部分は第二外国語を初めて学ぶことになる。学生の多くは、卒業の必修単位をとるために文法等を覚えることで精一杯になりがちである。しかし、外国語は本来使うために学ぶものであろう。語学学習を生き生きとしたものにするため、このドイツ語教科書は様々な工夫を凝らしている。まず、様々な場面に対応した短い「対話」を数多くこなしながら、段階的に語彙を増やしたり文法の知識が増えるように配慮した。「対話」を通してドイツ語を総合的に学ぶのが目的である。また、文法に関する説明は簡潔にし、その代わり美しい写真を数多く入れた。自習書ではなく、教室で学習者と教師が様々なやりとりを行うことを前提とした教科書であることを意識した構成となっている。また練習問題も学習者の創意工夫を引き出すよう留意されたものである。最後にインターネット活用によるドイツ語習得のすすめ等、エピソードの豊富さが挙げられる。時代にあった教科書と言えよう。

<http://www.bononet.or.jp/~senshuup/>



▼また、目録、近刊・新刊案内、書籍内容を一部分公開した立ち読みコーナーや著者のホームページのリンク集なども設けてある。

▼小局のホームページは、書籍情報を読者にリアルタイムで伝えると同時に、書籍関連の記事を掲載し、広報誌の役割も兼ねている。
▼広報誌としては、現在は著者のエッセイを五本ほど掲載している。ちなみに、内容は「医と健康の近代」という特集である。なお、掲載された記事は再編集して小冊子にまとめ配布している。

開始日 一九九九年四月
更新回数 不定期

専修大学出版局

<http://www.dendai.ac.jp/press/>



▼今後、PDF形式による書籍の一部閲覧（立ち読みコーナー）や書評ネットワークと出版に関する連載、Mathematical関連のニュース、出版関係のリンクを充実させていきたいと思えます。

▼当出版局のホームページでは、現在販売している全書籍のデータを公開しています。とくに昨年度からの新刊書籍については書籍カバーをはじめ、内容紹介、まえがき、詳細目次など、紙面の関係で図書目録に入りきれない読者の求める内容をすべて局内で作成・運営して公開しています。

開始日 一九九八年二月
更新回数 隔週

東京電機大学出版局

<http://www.waseda-up.co.jp/>

◆ご案内
◆書籍のご購入について
◆新刊のご案内
◆既刊のご案内
◆分野別検索
◆フリー検索
◆Booksの検索を利用
※本ページの表示価格は本体価格の表示です。ご購入の際は別途消費税が加算されます。

早稲田大学出版部
〒169-0071
東京都新宿区戸塚町1-103
TEL:03-3203-1551
FAX:03-3207-0406

Waseda University Press
1-103 Totokamachi,
Shinjuku-ku
Tokyo 169-0071 Japan
E-Mail: wup0312@waseda.ac.jp

▼今後は各書籍の内容紹介の充実を図り、新刊を中心に、装丁の画像を掲載していく予定です。

▼書店データとしては、「図書目録」に収録されている書籍の著訳者・编者名、判型、頁数、本体価格、ISBNコードを知ることができます。
⑤と⑥は、書協の「BOOKS」を利用して速やかな検索が可能です。
▼今後は各書籍の内容紹介の充実を図り、新刊を中心に、装丁の画像を掲載していく予定です。

開始日 一九九八年二月
更新回数 月一回

早稲田大学出版部

新刊案内 '99・7・9

■北海道大学図書刊行会

会社荘園制—アメリカ型ウエルフェア・キャピタリズムの軌跡

S・M・ジャコビー／内田一秀・中本和秀・鈴木良始・

平尾武久・森泉訳 七五〇〇円

21世紀の北海道をひらく—今あらためて「自立」を考える

大場良次・小林甫・木村純編著 一八〇〇円

脳科学実験マニュアル 本間研一・福島菊郎編著 三八〇〇円

南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説

山根正気・幾留秀一・寺山守 二五〇〇〇円

水環境の工学と再利用 浅野孝・丹保憲仁監修 六〇〇〇円

魚の自然史—水中の進化学 松浦啓一・宮正樹編著 三〇〇〇円

英語学と現代の言語理論 葛西清蔵編著 五六〇〇円

■聖学院大学出版会

オフィス業務改革 後藤 兼一 二二〇〇円

■麗澤大学出版会

出会いの風景—世界の中の日本文化 服部 英二 一四〇〇円

松下幸之助—実践経営哲学の先駆者 平田 雅彦 四〇〇円

■慶應義塾大学出版会

浅利慶太の四季 著述集1 浅利 慶太 三三〇〇円

—演劇の回復のために— 演劇論集— 浅利 慶太 三三〇〇円

浅利慶太の四季 著述集2 浅利 慶太 三四〇〇円

—劇場は我が恋人— 演出ノート選— 浅利 慶太 三四〇〇円

浅利慶太の四季 著述集4

—21世紀への眼差し— 現代社会考— 浅利 慶太 三四〇〇円

19世紀アメリカの法と経済 折原 卓美 四六〇〇円

講座 人間と福祉 障害者・家族・専門家の共働

小松隆二・富安芳和・小谷津孝明編 二八〇〇円

環境学事始め 川村晃生編 二四〇〇円

子どもの意欲を育む—私の地域社会教育— 堀田敏之 一八〇〇円

講演集3 大学生活と読書

慶應義塾大学通信教育部編 二二〇〇円

熟年人生の経済学 塩澤 修平 一五〇〇円

女性と人権 人見 康子 二八〇〇円

随想集—下湧別村 桑原 三郎 三〇〇〇円

アカデミックライティング 応用編—文学— 松田隆美他 二〇〇〇円

文化研究のための英語論文作成法— 二〇〇〇円

Keio UP選書 笠原 英彦 二二〇〇円

日本の医療行政—その歴史と課題— 二二〇〇円

慶應義塾大学法学研究会叢書68 二二〇〇円

下級審商事判例評釈—昭和60年〜63年— 六五〇〇円

日本政治の過去・現在・未来 慶應義塾大学商法研究会編著 六五〇〇円

変動する政治と社会—解説の手法— 小林良彰編著 二五〇〇円

現代意識の諸相—学問・芸術からの照射— 根岸毅・大石裕編著 二五〇〇円

驚見誠一編著 二五〇〇円

■産能大学出版部

企業発展の礎となる経営理念の研究 佐々木 直 一六〇〇円
組織設計概論 戦略的組織制度の理論と実際 波頭 亮 二〇〇〇円

越えられない人生のハードルはない 池田 好隆 一五〇〇円
認識成長のマネジメント

—実践的リーダーであるための基礎知識—
—実践的リーダー— 佐伯 雅哉 一八〇〇円
—実践的リーダー— マーフィー理論研究会編著 一五〇〇円

プロ技術者への道
—生産設計と省力・省エネルギー化— 一八〇〇円
—学習社会における戦略的リーダーシップ—

—学習社会における戦略的リーダーシップ— レンナート・ローリン他/小林 薫訳 二五〇〇円
—学習社会における戦略的リーダーシップ— 奈良 武 二六〇〇円

■専修大学出版局
癒しを生きた人々—近代知のオルタナティブ— 二二〇〇円
田邊信太郎・島蘭進・弓山達也編 三四〇〇円

商号の研究 松岡誠之助 三四〇〇円

■玉川大学出版部
教育学講義〈西洋の教育思想10〉 九〇〇〇円
F・シュライエルマッハー/長井和雄・西村皓訳

ドイツ国民に告ぐ〈西洋の教育思想12〉 六〇〇〇円
J・フィヒテ/石原達二訳

神秘を彩るイコナーリーナ・デルペーロ現代イコノ作品集— 六〇〇〇円
L・デルペーロ
文化とグローバル化—現代社会とアイデンティティ表現— 六〇〇〇円

A・キング編/山中弘・安藤充・保呂篤彦訳 四〇〇〇円
親から子へ 幸せの贈りもの—自尊感情を伸ばす5つの原則—

E・アンダーソン他/荒木紀幸監訳 一八〇〇円
芭蕉とユーモア—俳諧性の哲学— 成川 武夫 二八〇〇円

母のための健康学 小野 三嗣 二〇〇〇円
幼児教育学総論 鈴木由美子 二二〇〇円

■中央大学出版部
訴訟法における法族の再検討 小島武司編著 七一〇〇円
会計深層構造論 田中 茂次 五五〇〇円

環境政策の便益—貨幣評価—
OECD編/鹿島 茂、W・ヘイズ、谷下雅義訳 一九〇〇円
日本労務管理史

—北海道の炭鉱の事例を中心にして— 松本 正徳 四四〇〇円
—工業所有権法における国際的消耗論— 桑田 三郎 五七〇〇円

—工業所有権法における国際的消耗論— 藤本哲也監訳 四〇〇〇円
—工業所有権法(第二版)— 榎崎みどり監訳 四五〇〇円
—工業所有権法(第二版)— 『シスター・キャリー』の現在 山内惟介編著 二四〇〇円

—工業所有権法(第二版)— 『シスター・キャリー』の現在 大浦暁生監修 三五〇〇円
—工業所有権法(第二版)— 十九世紀ロシア農村司祭の生活 白石 治朗 二五〇〇円

■東海大学出版会
自律の時代の仕事・組織・人間 望月 享子 二〇〇〇円
ナポリ臨海実験所—去来した日本の科学者たち—

—去来した日本の科学者たち— 中埜栄三・溝口 元・横田幸雄編著 二六〇〇円
—去来した日本の科学者たち— カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集 香取草之助監訳 二〇〇〇円

—去来した日本の科学者たち— 貝のバラダイス—磯の貝たちの行動と生態— 岩崎 敬二 二八〇〇円
—去来した日本の科学者たち— 花火の科学 細谷政夫・細谷文夫 二〇〇〇円

—去来した日本の科学者たち— 魚の分類の図鑑—さかなの進化を解き明かす— 上野輝彌・坂本一男 二八〇〇円
—去来した日本の科学者たち— 水棲無脊椎動物の最新学

—去来した日本の科学者たち—

奥谷喬司・太田秀・上島励編 一五〇〇〇円

工学系学生のためのヒルベルト空間入門 高橋 宣明 一八〇〇〇円

政党システムの理論 岩崎 正洋 二八〇〇〇円

留学生アドバイザーという仕事 一 国際教育交流のプロフェッショナルとして 服部まこと・三宅政子監訳 二六〇〇〇円

光を求めて―デンマーク成人教育五〇〇年の歴史から― 高倉尚子訳/川崎一彦監訳 七五〇〇〇円

節足動物と皮膚疾患 加納六郎編 一八〇〇〇円

バルメニデス哲学研究 一 「ある」その主語「あるもの(こと)をめぐる」― 鈴木 照雄 一〇〇〇〇円

■東京大学出版会 ことばと認知の発達(シリーズ人間の発達7) 中島誠・岡本夏木・村井潤一 二七〇〇〇円

教育改革と公共性 ―ボウルズ・ギンタスからハンナ・アレントへ 小玉 重夫 五二〇〇〇円

フランスへ先進諸国の社会保障6) 藤井良治・塩野谷祐一編 五二〇〇〇円

現代演劇のフィールドワーク―芸術生産の文化社会学 佐藤 郁哉 五二〇〇〇円

指導者なきドイツ帝国―ヴィルヘルム期ライヒ政治の変容と隘路 飯田 芳弘 五五〇〇〇円

フランスにおける公的金融と大衆貯蓄 ―預金供託金庫と貯蓄金庫― 一八一六―一九四四年 矢後 和彦 八〇〇〇〇円

風と人びと(UP選書7) 吉野 正敏 二〇〇〇〇円

中国絵画総合図録 続編3 日本篇 戸田祐佑・小川裕充編 三二〇〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇114 国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録 昭和篇150 国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

維新时期風説風俗史料選【全六セット】 日本史籍協会編 一八〇〇〇円

① 東西評林 新装版【全二冊】 二二〇〇〇円

② 東西紀聞 新装版【全二冊】 二五〇〇〇円

③ 甲子雜録 新装版【全三冊】 四〇〇〇〇円

④ 連城紀聞 新装版【全二冊】 二〇〇〇〇円

⑤ 連城漫筆 新装版【全二冊】 二〇〇〇〇円

⑥ 丁卯雜拾録 新装版【全二冊】 二〇〇〇〇円

死生観と生命倫理 関根清三編 三二〇〇〇円

講座社会学10 逸脱 宝月 誠編 三〇〇〇〇円

野島断層 写真と解説―兵庫県南部地震の地震断層 丸尾直美・塩野谷祐一編 五二〇〇〇円

放射化学概論【第2版】 中田高・岡田篤正編 四二〇〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇115 富永健・佐野博敏 三〇〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録 昭和篇151 国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

齟齬の誘惑 昭和本151 国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

ゲーム―駆け引きの世界(東京大学公開講座69) 運實 重彦 二〇〇〇〇円

社会階層―豊かさの中の不平等 原純輔・盛山和夫 二八〇〇〇円

丸山眞男講義録 第五冊―日本政治思想史 一九六五 林 幹人 三四〇〇〇円

刑法各論 林 幹人 三五〇〇〇円

企業会計とディスクロージャー 斎藤 静樹 三二〇〇〇円

土地と住宅市場の経済分析 山崎 福寿 四四〇〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇116 国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

■東京電機大学出版局

学生のためのC&C++
低温工学概論―超伝導技術を支えるもの―

中村 隆一 二三〇〇円
荻原宏康編著 四五〇〇円

アンテナおよび電波伝搬(理工学講座)

三輪進・加来信之 二三〇〇円
榛葉 實 一九〇〇円

光ファイバ通信概論(理工学講座)

高度のための第一種情報処理試験問題集午前(合格精選400題)
荒川幸式・林隆男 二二〇〇円

デジタル3種工事担任者試験問題集(合格精選400題)

吉川 忠久 一九〇〇円
安岡孝一・安岡素子 三六〇〇円

文字コードの世界

■東京農業大学出版会

■法政大学出版局

世俗の聖典―ロマンスの構造―

自我の記号論

中世の人間―ヨーロッパ人の精神構造と創造力―

N・フライ/中村健二・真野泰訳 二八〇〇円
N・ワイリー/船倉正憲訳 四八〇〇円

フン族―謎の古代帝国の興亡史―

J・ル・ゴフ編/鎌田博夫訳 五二〇〇円
E・A・トンブソン/木村伸義訳 四八〇〇円

歴史と記憶

南島経済史の研究

J・ル・ゴフ/立川孝一訳 四五〇〇円
意味を見失った時代―迷宮の岐路IV―
山本 弘文 四三〇〇円

両手いっぱい―の時間―不治の病におかされた子どもの心の記録―
C・カストリアディス/江口幹訳 三七〇〇円

B・M・ソークス/藤森和子訳 二三〇〇円

藍II(へのと人間の文化史65-II) 竹内 淳子 三二〇〇円

ニュー・ミメシス―シェイクスピアと現実描写―

A・D・ナトール/山形和美・山下孝子訳 四六〇〇円

ヤマガラの芸―文化史と行動学の視点から―

小山 幸子 二二〇〇円

歴史家の歩み―アリエス一九四三―八二―

Ph・アリエス/成瀬駒男・伊藤晃訳 四三〇〇円

寓話 塔からの眺め

G・アンダース/青木隆嘉訳 三三〇〇円
自然の体系I ドルバック/高橋安光・鶴野陵訳 六〇〇〇円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部

忍び寄る感染症―二一世紀の人々に待っているものは?―

町田 和彦 二六〇〇円

早稲田大学現代政治経済研究所研究叢書第12巻

21世紀の金融問題 秋葉弘哉編 三七〇〇円

叢書ワセダ・リブリ・ムンデイ

③イタリヤの政治―「普通でない民主主義国」の終り?―

馬場康雄・岡沢憲夫編 二九〇〇円

③イタリヤの経済―「メイド・イン・イタリヤ」を生み出すもの―

馬場康雄・岡沢憲夫編 二九〇〇円

③イタリヤの社会―遅れて来た「豊かな社会」の実像―

馬場康雄・奥島孝康編 二九〇〇円

■名古屋大学出版会

ティッシュ・エンジニアリング―組織工学の基礎と応用―

上田 実編 九〇〇〇円

モナドロジーの美学—ライプニッツ／西田幾多郎／アラン—

米山 優 五八〇〇円

絵画の東方—オリエンタリズムからジャポニスムへ—

稲賀 繁美 四八〇〇円

帝国主義と国際通貨体制

吉岡 昭彦 四八〇〇円

■京都大学学術出版会

「知恵」はどう伝わるか—ニホンザルの親から子へ伝わるもの—

〈生態学ライブラリー 6〉 田中伊知郎 二二〇〇円

〈地域間研究〉の試み(下)—世界の中で地域をとらえる—

〈地域研究叢書 8〉 高谷好一編著 四二〇〇円

陸水学 A・J・ホーン／C・R・ゴールドマン著

手塚泰彦訳 七八〇〇円

生きたる論理・生きたる倫理

〈京都大学総合人間学部／大学院人間・環境学研究科公開講座〉

竹安邦夫編著 二二〇〇円

人間性はどこから来たか—サル学からのアプローチ—

西田 利貞 二八〇〇円

改革解放期中国の農業政策—制度と組織の経済分析—

山本 裕美 四四〇〇円

認識と情報—総合人間学を求めて 1—有福孝岳編著 一七〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

フランス労働争議強制仲裁制度—一九三六年—一九三九年—

ジョエル・コルトン著／向井喜典監訳 岩村等ほか訳 四五〇〇円

満州事変前夜における 在間島総領事館文書 上

大阪経済法科大学間島史料研究会編 二五〇〇円

■大阪大学出版会

遥かなる目的地—ケンペルと徳川日本の出会い—

ポダルト・ベイリー&マサレラ編／中直一・小林早百合訳

三五〇〇円

Gender and Japanese History (Vol. 1)

脇田晴子・アンヌ・ブッシイ・上野千鶴子編著 七四〇〇円

■関西大学出版部

臨床認知科学—個人的知識を超えて— 野村 幸正 三一〇〇円

スタインベック文学の研究II—ポスト・カリフォルニア時代—

えんぴつ(上) 吉田永宏解題 三一〇〇円

えんぴつ(下) 吉田永宏解題 三二〇〇円

中世ウェールズを行く

チャールズ・カイトリー著／和田葉子訳 三五〇〇円

遠来の客

乾裕幸・諸澤巖・坂本悠貴雄 一四〇〇円

建設技術者のための知識情報処理の実践 田中 成典 九八〇〇円

アジアの中の台湾 石田 浩 一五〇〇円

日本漢学思想史論考 陶 徳民 三五〇〇円

生産文化論 藤田 彰久 三一〇〇円

GRUNDPROBLEME DER BETRIEBSFÜHRUNG UND

BETRIEBSWIRTSCHAFTSLEHRE 大橋 昭一 四八〇〇円

■九州大学出版会

癌の多様性からみた小型肺癌の基礎と臨床

〈第13回肺癌学云ワークショップ記録集〉 原信之監修 三〇〇〇円

闇の王国・光の王国—「カラマゾフの兄弟」を読むII—

責任原理—刑法的・法哲学的研究—〈法と国家〉 清水 孝純 三二〇〇円

コンピュータによる実戦数値計算法 アルトゥール・カウフマン／甲斐克則訳 八五〇〇円

流域林業の到達点と展開方向 松本 紘美 二八〇〇円
深尾清造編 五二〇〇円

旧韓国の教育と日本人
現代会計の国際的動向と展望
負債の定義と認識(第二版)

稲葉 継雄 六八〇〇円
津守常弘編 三八〇〇円

J・St・G・カー／徳賀芳弘訳 二八〇〇円

■東北大学出版会

Recent Advances in Biomagnetism

Takashi Yoshimoto, Makoto Kotani, Shinya Kuriki,

Hiroshi Karibe and Nobukazu Nakasato 一〇〇〇〇円

心の豊かさをつくる技術知

尾坂 芳夫 二五〇〇円

魯迅の仙台時代

阿部 兼也 六五〇〇円

ゾウリムシの遺伝学

樋渡宏一編 二〇〇〇円

種痘法受容の文化史

小田 泰子 二五〇〇円

■流通経済大学出版会

笑いに勝る良薬なし

R・ホールデン／荘司治訳 一八〇〇円

■三重大学出版会

ライフブック

堀場 義平 一五〇〇円

ドナウ河ドイツ語の旅 改訂版

都築正則／シュテファン・トゥルンマー共著 一五〇〇円

▼異常気象などという言葉は、百年、二百年のサイクルを俯瞰して発言すべきことで、ここ数年を比較して暑いのも寒いのも騒ぐのはおかしいのかも知れないが、それにしても、今年の夏は暑かった。そして大雨！ 八月末の豪雨では、本号の編集担当である慶應義塾大学出版会の事務所が冠水した。心からお見舞い申し上げるとともに、緊急事態の中で本号を仕上げて下さった近藤幸子さんに感謝したい。

▼さて、以前この欄に、DTPについて書いたことがある。あれからもう五年が経った。今、DTPはCTS(電算組版)を凌駕する勢いを見せている。印刷機材の見本市に行っても、CTSの市場で最大のシェアを誇ったS社のブースには閑古鳥が鳴き、DTPソフトのトップメーカーであるA社のデモンストレーションは、黒山の人だかりを押し分けて前に出なければチラシすら貰えないほどだ。

▼五年前、すでにその傾向はあったし、今日のDTPの隆盛は十分に予想されることだった。

しかしその方向は、残念ながら僕の期待とは異なっていた。

▼それは、活版からCTSへの移行の時と同様に、今回もまた印刷所主導の変革、あるいは、採算面だけを考えた変革にすぎないということだ。「印刷所のシステムが変わるんだから仕方がない」「出来は悪いけど、安いんだから、ま、いいか」という発想で、DTPの持つ可能性を引き

●製作の現場から 21

さまざまえる

DTP

出すことはできないだろう。

▼「編集者がDTPなどに関わるのは本末転倒だ」という意見は、耳にタコができるほど聞かされてきた。しかし、この意見の問題点は、編集者というものをきちんと定義していないことにある。確かに、企画専門、それ以外は何もしないという編集者であれば、この意見は正しいかも知れない。しかし少なくとも大

学出版部の大半では、製作にも携わっている編集者の方が多いはずだ。この場合、DTPは確実に編集者の力となりうる。

▼原稿に赤字で指定を加える。

それは、仕上りのイメージをオペレーターに伝えるための一種の翻訳作業だ。複雑な場合には赤字の指定では足りず、営業マンに言葉で伝える。営業マンはオペレーターに伝える。DTPなら、そのような伝言ゲームを介さず、赤字を入れるのと同じ時間で、編集者のイメージを組版に反映することができる。

▼一冊丸々編集者が組まなくても、見本組の段階までを手掛けるだけでも意味はある。見本組をデータで渡せば、印刷所はそのスタイルを定義化して使用することができる(印刷所と同じソフトを使うことが前提だが)。さらに、ほんのちよつとでもDTPソフトに触れることによつて、DTPの問題点も可能性も見えてくる。見えてくれば、出版社の側から、ソフトハウスに対して要望を提示することができ。DTPソフトがバージョン

アップを繰り返しながら、とりわけ日本語縦組みに關して一向に改善されないのは、編集者、出版社、そして出版関連諸団体の無関心にも責任があると思う。

▼さらに、自社DTPのメリットは、データの保存と再利用にある。印刷所で組んだ場合、保存されるデータには著作権と出版権に加えて、印刷所の組版のノウハウが含まれているから、必ずしも出版社の一存で再利用することはできない。しかもCTSであれば、利用しようと思つても、たぶん役に立たない。それを組んだ特定のシステムで出力するしか方法がないからだ。

▼それに対して、DTPのデータを自社で持つていけば、オンライン出版やオンデマンド出版にも対応できる(著者の了解は必要)。最近話題の取次店や大手書店によるオンデマンドはスキヤニングによる画像データを使用するようだが、これは過渡的な形態だ。将来に備えた、出版社自身によるデータの蓄積のためにも、DTPは大きな意味を持つている。(Desk Top Paranoia)

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
麗澤大学出版会	〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 TEL. 0471-73-3331 FAX. 0471-73-3154
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 042-739-8935 FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7 TEL. 03-5214-5540 FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614 FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-6368-1121 FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県竜ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356 FAX. 059-232-1356

大学出版(第43号)'99秋 平成11年10月1日発行 発行所/大学出版部協会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)87956

E-MAIL: mail@ajup-net.com URL: http://www.ajup-net.com/

頒布価格100円 千共